

2013年度 後期		リフレクションペーパー					
学科名	生物環境化学科						
科目名	有機化学Ⅱ						
科目区分	専門科目	単位数	2	開講時期	1年次後期		
必修・選択の別	必修(バイオサイエンスコース)、必修(食品生物資源コース)、必修(エネルギー・環境コース)						
担当者	菅野 憲一						
授業の到達目標(シラバスから)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芳香属性について理解し、求電子置換反応と置換基による配向性を修得する。</li> <li>・ラル化合物の絶対立体配置(R, S表示)、対掌体、ジアステレオマーに関して修得する。</li> <li>・求核置換反応機構を理解し、種々の化学合成に応用できるようにする。</li> <li>・ルイス酸-塩基に基づくアルコール、フェノール類の性質を修得する。</li> <li>・エーテ、エポキシドの物理的・化学的性質を理解し、その合成法を修得する。</li> </ul>						
日程と内容	<p>9/18 授業概要の説明、成績評価法、アルカン、アルケン、アルキンの命名法、反応の確認。</p> <p>9/25 芳香族化合物の命名と構造を修得する。</p> <p>10/ 2 芳香族化合物の求電子置換反応、反応機構を修得する。</p> <p>10/ 9 芳香族化合物の合成反応における配向性を修得する。</p> <p>10/16 対掌体、不斉炭素原子、R-S表示法を修得。</p> <p>10/23 光学活性、ジアステレオマー、メソ化合物および光学分割等の立体化学を修得する。</p> <p>10/30 有機ハロゲン化合物への求核置換反応を修得する。</p> <p>11/ 6 SN2反応機構、SN1反応機構を理解する。</p> <p>11/13 E2脱離反応機構、E1脱離反応機構を理解する。</p> <p>11/20 第9回までのまとめ(小テストを含む)。</p> <p>11/27 アルコール、フェノール類の構造およびその酸性度、塩基性を修得する。</p> <p>12/ 4 アルコール類の合成法、アルコールの脱水反応、酸化反応を修得する。</p> <p>12/11 エーテルの命名法とその物理的性質を理解し、開裂反応を修得する。</p> <p>12/18 エポキシドへの求核付加反応とその反応機構を修得する。</p> <p>1/15 第11回～第14回までのまとめ。</p> <p>1/22 定期試験</p>						
成績評価基準	定期試験	60%	実技	0%			
	臨時試験	40%	部外評価	0%			
	報告書・レポート	0%	プレゼンテーション	0%			
	課題	0%					
	演習	0%	計	100%			
授業到達目標の達成度	到達目標に掲げられた項目は、臨時試験および定期試験において試験された。その結果、高い合格率でありかつ、かつ評価対象者(不合格者も含む)の平均点は72点であった。昨年度の平均点87点と比較すると平均点は下がったものの概ね到達目標を達成しているものと考えられる。しかし、食品衛生課程の必修科目であるため、欠席超過によって不合格となった受講生が複数出てしまった。						
反省点	授業内容を削減する事ができないため、演習問題などで理解を促進するように努めたものの、講義についてこれない受講生もいた。宿題を出すことで自己学習を促したもののアンケート結果から見る限り予習復習をしたという受講生は3.8ポイントであり、あまり高いとはいえなかった。しかしながら、ほとんど全ての学生が授業に大変、協力的であった。						
来年度の計画	受講生のご協力のおかげで静寂な授業環境を維持できた。演習問題を工夫して、短い時間内に効率よく理解できるように工夫してゆきたい。これまで、有機化学Ⅰ、Ⅱでは教科書の半分程度しかカバーしていませんでしたが、カルボン酸やアミンなど重要な内容も教授する必要があるため、次年度からは有機化学Ⅱの内容の一部を有機化学Ⅰへ内容をシフトして、有機化学の教科書の内容を1年で修得できるようにする予定です。						
授業評価アンケートに対するコメント	総合評価は昨年度の7.8よりもポイントを上げて8.2であった。反省点を改善し、よりよい講義を目指します。						
履修登録者数	74名	定期試験受験者数	66名	合格者数	64名	合格率	97%